

TV 番組で、「べてるの家」の活動を目にして

当HPの先の記事「うつ症状が重くなる、ならないの境目域の側面を知りたい」で、「最近 TV 番組でもうつについて取り上げられているように思う。」と記したが、奇しくも昨日、それらに類する番組「問題あっても大丈夫 ～統合失調症と生きる～」が放送されていた。

番組は、以前に書籍「べてるの家の『非』援助論」の読後感（書籍等読後感関係（I）2003. 9.20. 「『弱さも我の一部なり』と云える勇気を持ちたい！」：参照）を記したことのある「べてるの家」の今を取材していた。

書籍の方で「精神障害の方々には人間関係の部分に最も深刻な『もろさ』抱えた人達であり、それ故に関係において回復し、関係の中で自信を取り戻していくしかない」と記載されていただけに、事務所の壁に大きく貼られた理念の中に、「三度の飯よりミーティング」、「手を動かすより口を動かせ」の文字。

毎朝のミーティングで、自分の体調に合わせてその日の働く時間の自己申告制のシーンも。

それでも「べてるの家」は年商1億円！一体、「決められた勤務時間内、一生懸命働く」ってどんな意味があることなのかと考えさせられる。

また、自分の幻聴症状や体験等を当事者同士で話し合う「事例研究」のシーンも。正に、「『非』援助論」の実践か……。

更に、理念の中に、「弱さの情報公開」の文字も。

先の記事に記載したように、周りに甘えて直ぐに話すという「『弱さの情報公開』＝『弱さも我の一部なり』と云える勇気」が日頃から必要かなということ、番組を見て改めて思った。

云うまでもなく誰でも多かれ少なかれ、苦悩を伴いながら日々生きてると思う。

時に、苦悩故の自分の「もろさ＝自分へ予期せぬ不都合への戸惑い」を自分自身ではコントロールできなくなり、その苦悩する心の叫びとして、いわゆる医学的な病気の症状としても現れてくるのではないのでしょうかね。

やはり、戸惑い等の要因を受容する「受容能力（「雑学BN」の「レポート関係」P、2004.06.16.「受容への過程・仮説模式図－試作－」：参照）」を日頃から養う心懸けも必要なことかなとも思った。